

## アメリカ生活レポート

ビジネスジャンプ新年3号（2009年1月7日発売）より

## 「勉強もバスケットも、みんなから応援もらってます」

宮地陽子●取材・文・撮影  
text & photo by Yoko Miyaji

スラムダンク奨学生として渡米して9ヶ月。10月からは待ちに待ったバスケットボール・シーズンも始まった。日本との違いを身をもって感じ、苦勞しながらも、毎日をエンジョイしているという並里選手。アメリカのバスケットボール、サウスセントでの生活について聞いてみた。

「ナリ！ナリ！ナリ！」

体育館のスタンドから、賑やかな声援が聞こえてきた。11月半ば、スラムダンク奨学生1期生の並里成が、留学先のサウスセント校（米国・コネチカット州）のユニフォームを着て、初めてホームコートに立ったときのことだ。

熱狂的な声援を送っていたのは、サウスセントでの並里の友人たちだ。どうやら、いつの間にか私設応援団が作られていたようだ。

「ナリ（並里）のプレーは見ていて本当に楽しいから、ああやって熱狂的に応援したくなるんだらうね」と一人の先生が言う。この先生も並里のプレーに魅了されたらしい。

スピーディーなプレー。巧みなボールハンドリング。広い視野を生かし、左右どちらからでも出すことができるパス。相手のディフェンスがびったりとマークしてきたら、本領発揮とばかりにディフェンスを翻弄し、かわして攻める。ディフェンスではスティールから攻めに転じる。時々飛び出すトリッキーで派手なプレーに、体育館全体からどよめきが広がった。

並里は「自分的には普通のプレーをただけなんですけれどね」と言いながらも、仲間からの喝采が嬉しそうだ。

「自分が出てきたら、みんな、会場が沸いて、自分でも何でかよくわからないですけど。みんなから応援されています」

仲間から応援されているのは、試合のときだけではない。たとえばこんなこともあった。

サウスセントでは、生徒全員が卒業するまでに必ず暗唱しなくてはいけない古典の詩がある。しかも、バスケットボール部の選手たちは、それを10月のシーズン開始前に暗唱するようと言われていた。現代の英語でのコミュニケーションすら苦勞している並里も例外ではない。

「15行か20行ぐらいあって、昔の英語なので意味も理解できないくらい難しく。自分、絶対にできないと思ったんですよ。あのときが一番きつかった」と並里は振り返る。

暗唱ができないとバスケットボールもさせてもらえないと言われ、自称「追い込まれたらやるタイプ」の並里は必死になって覚え、なんとかみんなの前で暗唱するまでにこぎつけた。

「そしたら、みんなが拍手で迎えてくれて。（暗唱が）終わったときも、本当にみんな盛り上がってました」と笑顔を見せた。



母国を離れ、慣れない英語を使って生活する並里にとって、まわりの友達からの応援は毎日の支えになっているに違いない。そう言うと、「そうですね。みんなから応援されています」と、さっきと同じセリフを繰り返した。そして、こうも言い足した。

「別に、たいしたことはしてないんですけど」

実際のところ、バスケットボールでも勉強でも、まだ満足できるような状態ではないことは確かだ。むしろ、壁にぶつかっていることを感じるもののほうが多い。

何といっても苦勞しているのは勉強。その最大の障害となっているのが英語だ。たとえば、数学のテストを受けても質問の英語が理解できなければ、数学の問題を解く以前のところでつまづいてしまう。



「英語も前よりわかってきているんですけど、1年しかないから…」と並里。

「本当に必死に勉強しないと」

スラムダンク奨学金を受けての留学期間は残り半年弱。その後アメリカの大学に進学し、バスケットボールを続けるためには、英語で大学進学適正テスト(SAT)を受け、一定以上の点数を取る必要がある。いくらバスケットボールの能力を認められても、成績面でクリアできなければNCAAの大学への進学は難しい。

英語は、バスケットボールをする上でも障害となってくる。

大声援を受けた開幕戦の3試合後、並里はベンチから立つことなく試合終了を迎えた。生まれて初めてのDNP(不出場)である。チームは、強豪のバターソン校相手に34対53

の大差でシーズン最初の黒星を喫した。小さなゾーンで守ってきたバターソンに対し、シュートがまったく入らなかった。それをベンチから見ているしかなかった並里は「みんな調子が悪かったですね。あのときは、まだ自分が出たほうがマシだったんじゃないかと思ってました」と悔しがる。

とはいえ、心では悔しがりながらも、頭の中では意外と冷静に自分の状況を理解し、分析してもいた。

「バスケットの部分では、自分はまだミスが多いです。あとはやっぱり英語ですね。いい監督ほど、ポイントガードに指示がいくんですよ。自分は指示を聞くことはできるんですけど、まだみんなに伝えることができなくて。それが(プレータイムに限られる)原因じゃないかと思う」

言葉の壁がプレータイムに影響していることは、ヘッドコーチのケルビン・ジェファーソンも同意する。

「ナリは、バスケットボールはよく理解していると思う。覚えるのも早い。プレーを指示すればすぐに理解するし、二度繰り返して言う必要がない」とジェファーソン・コーチ。「ただ、試合中、試合の流れの中でプレーを指示しても、時々わからないことがあるようだ。正直言って、そのために、彼が試合に出ているときには使えるプレーが限られてしまうという問題はある。彼のバスケットボールの能力にはまったく問題を感じていないので、ナリに必要なのは、そういった小さな壁を乗り越えることだけだ」

実際のプレー面では、選手の体格やファウルなどで日本との差を感じる一方、自分でも通用する面があるという手ごたえを感じていると言う。

12月はじめ、『スラムダンク』の作者で、スラムダンク奨学金の設立者でもある井上雄彦氏がサウスセントの並里を訪れた。井上氏から、アメリカでも通用していると感じたことは何だったかと聞かれ、並里はまっすぐにスピードとパスをあげた。

たとえば、パスは日本ではチームメイトが取りやすいようにパスのスピードを緩めたりしていたのだが、アメリカではむしろ速いパスのほうが好まれる。つまり、自分の力を抑えることなく思い切りプレーできるのだ。

ただしその一方で、スピードが速くなればなるほど、少しのずれがミスにつながるということも自覚している。

「アメリカ人は大きいし、手が長いから、パスが(ディフェンスの手に)かかったりするんです。だから、その分コントロールが必要になってくる」と並里は説明する。それだけ高いレベルでのプレーが必要な環境にいるのだから、選手としてはやりがいがあり、成長も期待できることは間違いない。

アメリカで経験するほかの壁にも同じことが言えるのかもしれない。確かに英語や勉強など、日本にいればしなかったような苦勞もしている。しかし、努力し、その壁を抜けることができれば、それだけ自分が成長することができる。そうやって努力し、ハッスルし続ければ、応援団もさらに大きくなっていくはずだ。

ジェファーソン・コーチも、こう言っていた。

「私はナリのことを手助けしてあげたい。彼はいい選手だし、(アメリカで)大学に行ってほしいからね。彼なら大学で成功できると思う。私も、それを見てみたいんだ」

